

六、試験

南向きのは大きな建物だった。扁額に“^{ひげん}毘騫試院”*と書いてあり、左側に一枚白紙が貼ってあって、欧体の大字で“高等文人試験”と書いてある。この才能選抜の重要地点は当然警備が厳重で、閑人は入れない。だがどうしてかわたしは紛れ込んだ。あるいは某学者の言うように、人間はもともと“氣”が変化したものだから、夢魂が門の隙間から潜り込めるのかもしれない。第二の門に入って中を覗くと、豆のようなともし火が点々と満場にともって、暗緑色をなし、本を読む声が熱風に乗って次々と吹き付けてきて、絶えんとして亦絶えず、異常に悲惨である。地面には本や原稿が散乱し、いずれも摘発されたカンニング用品である。その中には『聊齋志異』『坐花志果』『文章遊戯』などごくありふれた書籍の他に、『金藕魄』、『臭環恨耳』及び『おじいさんの秘密』といった、めったに見られない珍本がたくさんあった。

わたしは敷石の道に沿って前に行くと、左側の会場の入り口に“創作文童試験場”とあり、右側は“批評文童試験場”であった。まず左側に行き、会場に入って見ると、受験者が一生懸命に彼らの字句を推敲するのに没頭しているのが見えるばかり、だからわたしが近寄っても、誰もまるで気がつかない。題目は「売油郎の花魁を独占するに擬して作る」というものであったが、みんなの口から漏れるのは、「蝶よ」やあるいは「三十六鴛鴦——而るに……えーえー……」といったことばかりだったが、誰かが突然大声で唸った、“蓋し天人なり一い”と。ある人は第一行の初めに“某生者”という三字しか書いていない、すると捺印の学の先生がやってきて“者”の字の上に“克己復礼”という陽文の小さなハンコを押された。その人はまるで手足が萎えたようになって、ただ目を見張ったままブツブツと“これでもうお終いだ！”を繰り返した。わたしは思わず門口に積まれた本の中にはおそらく彼の片割れがあるに違いないと思った。なぜなら彼の腹の中にはこの三字しかないのだから、そのほかの残りは必ずかの別の本の中にあるに違いないことがわかる。

批評の試験場の題目は「試みに唐詩三百首を批改せよ」で、受験者は各人前にてらてら光る用紙に石印された唐詩を並べ、行款と天地は特別に大きく、彼らはそこに改作と批評を加えるのである。規則によれば毎首に批改をしなければならないので、とても忙しい。改作が十分の一にもならないのに、みんな已に顔中に脂汗をかいて、頭には更に湯気がたっていて、まるで万頭を蒸す蒸籠のようである。彼らが改作した詩はすこぶる新奇である。残念なことに醒めてから多くは忘れてしまって、一首しか覚えていないが、李太白の“床前月光明らかなり”の詩を改めたものである。

“床前日光明らかにして、
疑うらくは是れ地下の霜かと。
手を挙げて明日を望み、
手を低れて故郷を忘る。”

※初出：1922年8月27日『晨報副刊』

* 毘騫試院 毘騫は国名、『南史』夷貊伝に“頓遜〔今のヴェトナムよりまだ南〕の外の大海洲中に、又毗騫国有り、扶南を去ること八千里。伝うるにその王身の長丈二、頸の長三尺、古より死なざれば、その年を知らず。王は神聖にして、国中の人の善悪及び将来の事、王みな之を知る、是を以て敢えて欺く者なし。南方号して長頸王と曰う云々”とある。言葉は扶南と少し違い、産物は金、人肉を食する習慣がある等々が記されている。ここは夢の話なので、あるのかないのか分からぬ国の名を使ったのである。“試院”は試験場のこと。